

ベトナムの漢文説話における 「鬼退治」のモチーフに関する比較研究

— 『嶺南撫怪』を中心に—

NGUYEN THI OANH

はじめに

「鬼退治」というモチーフは世界の民間文学の中によく見られるモチーフである。日本、ベトナムの説話も例外ではない。また、中国では早くも晋代（3-5世紀）から唐代（7-10世紀）に成立した『搜神記』『幽怪録』などの中に「鬼退治」の話が豊富に存在する。漢字・漢文文化圏に属するベトナムと日本の説話世界において、中国の説話・伝承の移入はしばしば見られる現象である。ベトナムの漢文説話と何らかの関係があると思われる中国の説話・伝承については先学が多数言及しているが、ベトナム漢文説話における「鬼退治」というモチーフに関しては、中国を始め、日本、朝鮮との比較研究は今までのところ、未開拓の状況である。日本では、日中比較の先行研究として、河野貴美子氏が『日本霊異記と中国の伝承』^①の中で、中国の説話・伝承の影響を新たな類話の発掘と検討を通じて明らかにした。また、台湾では林翠萍氏が『『搜神記』与『嶺南撫怪』之比較研究』^②の中で両国の説話における「鬼神」について言及した。ベトナムではチャン・ティ・アン氏が「ベトナム民間伝説の流転と類型特徴」^③においてベトナムの漢文説話における「鬼神」について分析し、ベトナムの鬼神信仰における「神」と「怪」の観念を明らかにした。

本研究はまず、国内、国外の研究者の業績を参考にし、ベトナムの漢文説話における鬼神世界について概説する。次いで河野氏の分析を参考にして、ベト

ナムの漢文説話における「鬼退治」というモチーフを、日本と比較し、どのような相違があるのか、また、それぞれの受容様式がどのように異なっているのかを考察するものである。ベトナム、日本の各説話における「鬼退治」のモチーフを考察し、それを通して、ベトナムにおける受容様式を探り、ベトナムの特質を明らかにしていきたい。

第一章：ベトナムの漢文説話における鬼神世界についての概説

1. ベトナム漢文説話における「鬼神」に関する説話数について

ベトナム漢文説話は多くはないが、チューノム文学より古い時代から出現していた。古代の様々な書に影響を与えた『報極伝』と『外史記』は今日に伝わらないが、李、陳朝（11～14世紀）に成立した現存する古い説話集として『禪苑集英』^④、『越甸幽霊集』、『嶺南摭怪』が挙げられる。黎王朝（15～18世紀）には、漢文説話の頂点をなす作品『伝奇漫録』がグエン・ズー（阮興）によって著された。また、漢文説話の典型的な作品として、ブー・フォン・デー氏（武方提）の『公餘捷記』、ファン・デイン・ホー（范廷琥）の『雨中隨筆』、ファン・デイン・ホー（范廷琥）、グエン・アン（阮案）の『桑滄偶録』、ブー・チン（武禎）の『蘭池見聞録』、寓話作品としてファン・デイン・ズク（范廷煜）の『雲囊小史』などが挙げられる。筆者は、漢喃研究所が所蔵する22の漢文説話作品の中から「鬼神」に関する約250の話を出した^⑤。

13世紀に成立したベトナム李、陳朝の説話の中で「鬼神」が一番多く出現するのは『越甸幽霊集』と『嶺南摭怪』である。ベトナム漢文説話の起源は、武瓊が『嶺南摭怪』の序で述べているように「太古から春秋戦国時代以前まで、南国の風俗はまだ簡素で、収録する歴史古典はなく、散逸した話も多いが、一部の話が民間に伝わってきた」（自春秋戦国以前，去古未遠，南俗猶稱簡略，未有史冊已記其實，故古事率多遺亡，其幸存而不泯，特民間之口傳耳）^⑥。民衆が伝えてきた話を収集し、編纂したのが本書である。ベトナムの神話、伝説、昔話などの宝庫から作者は話題、モチーフを厳選し、面白く書き変えた。特に、

『嶺南摭怪』がベトナムの寺院、廟、祠堂、神社などに伝えられた神跡^⑦等に影響を与えた。また、武氏は序に「本書は晋の『搜神記』、唐の『幽怪録』と一致する」と述べているように文体表現も中国の仏典説話や伝奇小説の影響を強く受けている。

2. ベトナムの漢文説話における鬼神観念について

ベトナムで一般的に知られる「鬼神」とは、死者の亡霊を意味すると考えられる。人間が亡くなった後も存在し続けるのは靈魂である。靈魂は他の世界にいながらにして、人間の世界に様々な影響を与える。鬼神には大力、飛行、変化などの能力が有り、人間に幸福をもたらしたり、危害を与えたりする。また、鬼神は吉凶の兆を知らせたり、人間の考えを理解したり、また動物に命令を与えたりする。人間に幸福をもたらす霊を「神」、「神靈」、「鬼神」などと称し、危害を与える霊を「魔怪」「魔鬼」と称している。ベトナム漢文説話では「鬼」というのは「魔」「魔鬼」「妖魔」を意味する以外に「牛頭馬頭」の姿をする地獄の鬼をも意味するが、恐怖の対象となるヨーロッパやギリシアなどの吸血鬼や人を食らう悪鬼の姿はあまり見られない。

陳朝期1329年に成立した『越甸幽霊集』の序で、著者リー・テー・スエン（李濟川）は鬼神について言及している。「古代の聖人がいうには、聡明で正直な者が神と称するに足るのであり、淫神や邪神を濫りに神と称してはいけない」（古聖人曰、聰明正直足以稱神、非淫祠邪崇濫得而稱也）と。ここでいう「正直」とはつまり、国難を除く手助けをするために亡くなった者は神と称され奉られるということであり、正直ではない者や邪悪な者は濫りに神と称してはいけないということである。人間の邪鬼への尊崇については直接言及しないが、当時、神と同時に鬼も祀られていたのは事実である。11世紀に中国から独立した最初の王朝である李朝（1010-1225）では、中国の圧力に対抗するためにより強大な政権が求められ、民族精神の高揚を目的としつつ太古の昔から伝えられる伝説や伝承を記録し、歴史書や文学作品を編纂した。『越甸幽霊集』は神々に関する説話27篇（正編）を収めるが、内容としては夢の中で神々が王侯

に託宣を下し、賊を平定し、国難を除く手助けをし、その功により神々が位階を奉られるというのがほとんどである。また、同書の序に「あるいは精粹な山川の神々、あるいは優れた人物の靈魂である。その神々が当時は氣勢をあげ、来世には英霊を総べる」（或山川精粹，或人物傑靈，騰氣於當時，總英靈於來世）と書いているように山川の神祇と国難を除く手助けをする人物は当時、氣勢をあげるだけでなく、来世にも強い影響を与えたと考えられていた。

16世紀に至ると黎朝期の儒家が儒教思想の立場で鬼神について引き続き議論している。『伝奇漫録』『龍庭対訟録』^⑧（以下、本稿引用の『伝奇漫録』の条目上記に同じ）の中でゲン・ズー（阮瑒）は鬼神について以下のように述べている。「災難を止める者を祀るし大患を防ぐ者も祀るというのは祭祀の恒例である。祀られる鬼神は自分の名称を守らなければならない。どうして、人間の供え物を受けている鬼神は人間に危害を与えたりするか（中略）。そこで唐の（狄）仁傑が河南を巡撫して、皇帝に千七百の淫祠の撤去を奉上した。それは当然だ」（能御大菑則祀之，能捍大患則祀之，祭法也。亨是祭者當顧名思義，烏有歆人之祀而為人之禍哉。（中略）此仁傑巡撫河南奏毀淫祠千七百所，良有以哉）。

ゲン・ズーは、ベトナムでの祭祀は中国という祭祀の根から形成されるから災難を止める者を祀るし大患を防ぐ者も祀るというのは当然であるが、どうして、人間の供え物を受けている鬼神が人間に危害を与えたりするか不思議である、と批判している。そして、唐の狄仁傑が淫祠の撤去を奏上したという故事を引用し、当時のベトナムにおけるでたらめな祭祀を暗喩している。

18世紀-19世紀に至ると、儒家達が以上の鬼神尊卑観念について引き続き議論している。『雨中隨筆』『子兒福神』の中でファン・ディン・ホーは鬼神について以下のように述べている。「昔、祀るというのは神祇を祀る以外、功績と徳行をもつ者をも祀り、災難を止め、大患をふせぐ者も祀った。畏、圧、溺によって死んだ者は弔いさえしないのに、そうしたもので、どうして村を挙げ

て奉ることができよう」(古之祀, 自神祇之外有功德者祀之, 能禁大災捍大患者祀之, 至於畏壓溺三者且死不吊況舉邑而奉之乎)と。

神霊を祀るとするのは神祇、並びに、功績と徳行をもっている者、災難を阻止し、大患を防ぐ者を祀るのが当然であるのに、恐怖のあまり亡くなったり、圧死したり、溺死した者までが村をあげて祀られるのは可笑しいことではないかということである。彼は人間の邪神への尊崇について指摘しているのではなく、例として邪神を祀ることを挙げ、その点を指摘している。例えば、本書の「馬公主廟」では、極めて淫らな公主が亡くなって神霊になり、人間が人間の生殖器のような果物の種を供え物として祀ると幸福をもたらしたという話がある。彼がその話の最後で「こんな淫らな女性を千秋に祀るのはドン・チョウ(東潮)^⑨のファン・ニャン邪神^⑩と同様、極めて可笑しいことである」と指摘するように、依然として当時の信仰には、神と鬼の両方を祀ることがあったことを物語っている。人間は優れた人物を尊敬するときにその霊を祀るが、邪悪な人物に恐怖を抱き恨む時にもその亡霊を祀る。

また、李、陳朝に成立した漢文説話における鬼神に関する説話と違って、黎朝と阮朝に成立した漢文説話の中では、鬼神に関する説話数が増加するばかりではなく、「神霊」と「邪神」の差別意識が曖昧になってくる。外国に対する危機が無くなった時期において、英雄を崇拝する代わりに「鬼退治」の偉業を称えるようになる。例えば、人間の力に負けた神霊、品上を極めて没落し威厳をなくしてしまった神霊も存在する。また、人間に判決を覆された神霊、人間に騙された神霊さえ存在する。

そのような状況は17世紀から19世紀まで続く。当時ベトナムでは内戦と政権に対する抵抗運動が続き、経済は不景気で、難を避けるため故郷の村を捨てて移住したり、路上で餓死したり、また、強盗がはびこる不安定な社会になってしまったため、尊崇すべき神霊像が崩壊してしまったのである。

3. ベトナム漢文説話における人間と鬼神との出会いに関して

研究者によると、宇宙には人間と鬼神が共存している。人間と鬼神との出会

いには主に三つの方法があり、一つは人間が鬼神と結婚すること、一つは競争する際鬼神に手を借りること、残る一つは人間が鬼神に害を加えられることである。ベトナムの漢文説話の中では人間と鬼神との接触方法は三つあり、直接出会うか、夢に見るか、巫女（みこ）の言葉に従ってやってくる。そのうち最も普遍的な方法は人間の夢に現れることである^⑪。

例えば、結婚相手を渴望するあまり、人間が鬼神と結婚してしまうという話がある。美人と結婚し、美人が靈鬼に変化したことが分かっても離れられず、結局亡くなってしまう話（『伝奇漫録』「木綿樹伝」）。若くて綺麗な女性が正室に打たれて亡くなったが、靈魂は消えずに美人に変身し、男性と結婚する。その後、道士に符で殺される話（『伝奇漫録』「昌江妖怪録」）。また、阮仲常という人物が夢の中で、洞庭湖で美人に会う約束をする。その後、使者として中国に行き、洞庭湖で亡くなってしまう話（『桑滄隅録』「阮公仲常」）。

また、鬼神は常に人間の世界を遊行し、寺院、祠などに宿り、人間の供え物を享受するため、鬼神が人間に頼み事をされたり、制御されたり、競争すべき際に人間のことを手助けするという話も少なくない。例えば、「強暴」は魚や蝦を取って供え物として常に灶神に差し出していた。それで、灶神は「強暴」が雷神に打撃されることを早めに知っていたので秘かに知らせた。「強暴」は知らせてもらった通り、雷神を退治することができた（『公餘捷記』「強暴大王」）^⑫。人間の供え物を享受した鬼が、疫病にかかった人々を死から救った（『伝奇漫録』の「夜叉部帥録」）。昌氏は毎年、無名のお墓の土なりを築く。亡霊は儒家に変身し、彼に衣服をあげたり、親戚の家まで案内したり、ご馳走を食べさせたりするなどの恩返しをする（『婆心懸鏡録』の「築墓報酬」）。

またベトナム漢文説話には、人間が鬼に危害を加えられる話が少なくない。鬼が害を加える話には三つの類型があり、人を病気にさせたり、人をからかったり、人と性交したりする。例を挙げると、年配の女優がお寺の龍の神様に打たれて亡くなった。鬼になってからお寺の後ろにある榕樹に泊り、往来するハンサムな男性をからかう。気を悪くした男性は病気になって死んでしまう

(『雨中隨筆』の「榕樹」)。

人間と鬼神とが出会う場所は亭、廟など人々が集まる場所だけではなく、古木、坂なども多いと思う。例を挙げると、「二人の夫婦はある日供え物（紙製の冥器）を売りに行って、帰る途中、雷首坂に至ると、雨が降ってきた。道がまだ遠く、夕方になって、暗くなったので、巨樹に雨宿った。彼らは雷電の閃光で、木の下に一つの別荘があるのが突然見えた。宿泊しようと思い、別荘の主人に一泊泊めてもらった。夜半、別荘の主人が疫病で死亡する人々の名簿を作るという話を聞き、大変怖かった。朝になると、寝たところは別荘ではなく、坂の隣にある二枚のバナナの葉であった。驚き慌てて、田舎に帰った。翌年、疫病が起こって、道で死亡した人は多かった。あの夫婦がその夜に聞いた話の通りだった」（『蘭池見聞録』の「雷首坂」）。

人間は鬼に会うと怖くて、反抗することさえできず、鬼の言いなりになる話もある。例えば、丁氏と一緒に酒を飲む人が木に輪切りの紐をかけて、丁氏にその紐を通り抜けるよう誘い、通り抜けると池のところに連れて行かれ、池に倒れると目覚めたという話（『雲囊小史』の「隘鬼」）。

一方、鬼を退治することができる人もおり、あるいは民衆のために悪神を福神に化身させる人間もいる。ベトナムの漢文説話にはそのような「鬼退治」に関する説話も少なくない。次にベトナムの漢文説話における「鬼退治」の説話について探してみる。

第二章：ベトナムの漢文説話における「鬼退治」の説話について

（『嶺南摭怪』を中心に）

中国の『搜神記』、日本の『日本靈異記』、『今昔物語集』と同様、ベトナムでは早くも李、陳朝期（13-14世紀）成立の『嶺南摭怪』に「鬼退治」に関する話が見られる。河野貴美子氏は『日本靈異記』「得電之喜令生子強力在縁」（以下、本稿引用の『日本靈異記』の条目は上記に同じ）の内容を以下の要素に分けて考察している。

- ・夜毎に死者の出る建物
- ・鬼退治の方法——鬼魅との格闘
- ・鬼の再来——鬼との問答のモチーフを含めて
- ・燈を使用——鬼を火で照らすこと
- ・血を辿ること
- ・鬼の正体

本節では、『嶺南摭怪』の「金亀古伝」(以下、本稿引用の『嶺南摭怪』の条目は上記と同じ)の安陽王が城を造った際の故事として語られる鬼退治の内容が、この『日本霊異記』説話と類似のモチーフを有する説話としてとらえる。そして、河野氏の論考を辿りつつ、鬼退治の説話に関する項目を参考に、『嶺南摭怪』の「金亀古伝」における「鬼退治」に関する各モチーフについて考察する。

1. 夜毎に死者の出る建物

まず、『日本霊異記』における事件の発端は道場法師が童子として入った元興寺の鐘堂において、鐘を撞く童子が夜毎に死ぬという怪が起こったことに始まる。

夜そこに宿した者が害を受けたり、あるいは夜毎に死者が出るといった建物の話はベトナム漢文説話においてもしばしば見受けられるものであり、特に『嶺南摭怪』の「金亀古伝」にはそうしたモチーフが散見される。「山の傍に館がある。館の主の名前は悟空という。白い鶏に変身した女性が居り、妖気に満ちている。人々が往来し、夜その館に宿泊すると千形万状に変化した妖精に殺害された人が甚だ多い」(旁山有館，館主名悟空，有一女化為白雞一隻，是乃鬼妖精餘氣。凡人民往來，每至館宿泊處焉鬼精化為千形萬狀而殺害之，人民死已甚繁)。その話において妖怪が登場する場所は、日本の『日本霊異記』、『今昔物語集』や中国の『搜神記』と同様、亭、廟、仏寺、旅館、役所など人々が共同生活するところである。また、死者の亡霊が古木に泊って、人を害する話も多い。

2. 鬼退治する人の性格

そして、『日本霊異記』では、童子は鬼の出るところと知りながら自らの力を頼んで「われ、この死ぬる災ひをとめむ」と衆僧に申し出、その役目を許可されるのである。これと同様の行動様式が、中国の怪亭の鬼魅退治説話、そして、『嶺南撫怪』にも次のような箇所が見られる。

悟空は館に泊まりに行き、王がそこに宿泊しているのを見ても、その人が王であることが分からなかった。悟空は「この館には常に妖精がおり、夜になると人を殺害するから、宿泊してはいけない。しかも今日はまだ暗くないから遠いところに行って、宿泊なさい。そうしないと災いと迷惑を被るかもしれない」と言った。王は笑いながら「生も死も運命だ。鬼魅が何をしようと、敢えて私と対決しようものか。恐るに足らない。」と言って宿った（悟空往寓館中、見王宿泊於此而悟空不知其王。悟空謂曰：此館常有妖精，夜常殺人，郎君不可宿泊，且今日未暮，速行他處宿泊。至暮恐有災惑。王笑曰：生死有命，鬼魅何為，敢與吾當耶。吾不足畏。乃寓宿）。

中国、日本と同様、「鬼退治」する人は鬼神を恐れない勇敢な人物である。『嶺南撫怪』は中国の説話と伝承に見られる「勇敢」というモチーフを取り入れたと思われるが、このようなモチーフは世界の英雄伝説、伝承によく見られる。

3. 鬼魅退治の方法

こうして、勇氣あるいは腕力をもった英雄が意を決して怪亭に宿った夜、それまで危害を与えてきた鬼魅が退治されることになるわけである。河野氏の『日本霊異記』と『搜神記』の「謝鯤」の比較によると『日本霊異記』の鬼退治の段の形成にはこの『搜神記』の「謝鯤」のような志怪小説のモチーフが取り入れられていったものと考えられる。「謝鯤」には以下の三つの共通点がある。

- ・ 鬼と建物の内外でつかみ合い、引っ張り合う
- ・ 鬼が身体の一部をもがれて逃げ帰る

・鬼の血の跡を翌朝たどって正体を確認する。

河野氏の分析による鬼魅退治の方法を見ると、『日本霊異記』の鬼退治と中国の『搜神記』の各話のモチーフとの共通性が非常に多いのである。しかし、中国の説話はある特定の説話が祖型とされて翻案的に形成されたとは考え難い。また、中国の説話には鬼退治説話は数多く存在しているから、『日本霊異記』の鬼退治説話との共通点も発見されるのである。『日本霊異記』の鬼退治説話はそれらの中国の伝承世界の持つモチーフの移入によって生み出され形成されたものと思われる。

もちろん、日本においても、中国においても力に頼らず、他の方法で鬼を退治する説話は数多くあるが、ベトナムには人間の智慧と神霊の力が協力することによって鬼が退治されるという話がある。『嶺南撫怪』では次のように語られている。

●鬼神の力で勝つ（金亀のお陰）

夜半ごろ、鬼魅が外からやって来て「だれがこの館に泊するのか。はやく門をあけないか」と叫んだ。金亀が「おまえこそ、ちりぢりに分散してしまえ」と怒鳴った。鬼魅は脅そうと火を放ったり、千形万異に分散、変化した。金亀はまた「おまえたちは鬼魅妖精であるから、館に入って人を追いかけてはいけない」と叱った。鶏が鳴く時間になって、妖精は逃げ散ってしまった（半夜之間、鬼精從外而來曰：何人在此館，不速開門。金龜叱曰：汝何為不走散乎？鬼精放火，散假千形萬異，變化多方，以驚異之。金龜叱罵鬼精曰：汝眾為鬼魅妖精，不得入居館中斥去人民。到雞鳴時各皆走散）。

●人間の智慧で勝つ

金亀が王に跡をつけさせてると、鬼魅は七曜山に至って、すべて山中に隠れた。翌日、館主は他の者と一緒に館に行き、宿泊していた者の死体を引き取り、埋葬しようとしたが、王は落ち着いて館主に「我は安陽王である。往来する民のためにこの館にいて、鬼を殺す」といった。館主は平伏しつつ王に「王様は安全をもたらす聖人です」と申し上げた。館主は靈術で衆民を救って頂く

ようお願い申し上げた。王は「白い鶏を殺して祀ると妖精は自ずと分散してしまう」といった。悟空は教えられた通り、帰ってから白い鶏を殺した。すると女の子が突然亡くなった。王は人に命じて、七曜山にお墓を掘らせた。古い楽器と骸骨を得て、焼いて砕き灰にして川に捨てた。すると鬼が減んだ（金龜令王追跡踵，至七曜山中，鬼精收藏殆盡。王與金龜乃還本館。明日館主呼人同來館處，將欲行宿泊人埋葬。王攸然告館主曰：我安陽王到此館殺除鬼精以利人民往來。館主趨尊首拜王曰：君居得若此聖人也。館主來乞王以靈術救人民。王曰：爾取白雞殺而祭之，鬼精自盡散。悟空從之，回殺白雞而悟空女子自然倒死。王即令人掘之七曜山中，得古樂器及鬼骸骨以燒之，使人搗碎為灰投之江河，鬼精遂滅）。

先学によると、『嶺南摭怪』のこの話は昔のベトナムの亀信仰から影響を受けただけではなく、中国の晋、唐、宋の時代に成立した漢籍における亀城についての伝承の影響を受けた話である¹³。また、国難を逃れる手助けをする王様と英雄が尊崇されているため、彼らに人間にない能力と智慧を想定する。それはベトナムの説話にだけ見られるモチーフではなく、世界の英雄伝説、伝承によくみられるものである。

4. 鬼の跡をたどること

河野氏は『日本靈異記』の中に見られる血をたどる話について「夜現れた正体不明のものの血の跡を翌朝にたどってその正体をつきとめたり、捉えて殺したりするというこのモチーフは、中国の鬼魅退治説話にも類例が見えるものであるが、それ以外にもまた、亡者との幽婚説話と異類婚説話においても常套手段として使われるモチーフである」と指摘した。ベトナムの『嶺南摭怪』の「金龜古伝」に鬼と格闘する場面はないから「血をたどる」というモチーフはない。しかし、本書に中国の説話と世界の伝説、伝承によく見られる「鬼の跡をたどる」というモチーフは見られる。『嶺南摭怪』に「鶏が鳴くと、鬼が逃散した。王は金龜の命令を受け、鬼の跡をたどって七曜山に至ると、鬼精は尽く隠れてしまった」「到雞鳴時各皆走散。金龜令王追跡踵，至七曜山中，鬼精

收藏殆盡」とある。

5. 鬼の再来

河野氏によると、『日本靈異記』には「鬼の再来」「燈の使用」「血をたどる」の各モチーフが見えるが、中国の鬼魅退治の鬼退治の段における各モチーフを比較すると異なるところもある。例えば、『搜神記』の卷十八(427)¹⁴と卷九(105)に「燈の使用」というモチーフがあるが、「血をたどる」というモチーフはない。卷十八(429)と卷十八(439)に「燈の使用」のモチーフはないが、「血をたどる」というモチーフがある。しかし、いずれの説話においても、最後には「鬼の正体」のモチーフが何であったかが明らかにされる。

『嶺南摭怪』にも「鬼の再来」というモチーフはあるが内容と順序が中国と日本とは全く異なる。『嶺南摭怪』では次のように描かれている。

「晩になって、王は金龜と一緒に越裳山に至ると鬼精が鸚鳥に変化し、手紙を携えて梅檀の樹の上に飛んで行った。すると龜は鼠に変化し、梅檀の樹に登って、鳥の足をかじった。口に含んでいた手紙は地に落ちた。王がその手紙を取ってみると、手紙は虫にかじられていた。それから、妖怪がいなくなった。王は又城を築くと約半月で城ができた(時日已晩，王與金龜行至越裳山，見鬼精已化為鸚鳥，啣書飛止于梅檀之樹上。金龜遂化為鼠升于梅檀之樹，嚙鸚鳥足，書遂墜于地下，王速收取之，書已蠹食盡。自此妖精無復作妖怪。王乃築城不過半月就其城)。

以上述べたように、『嶺南摭怪』における「鬼退治」は中国、日本の説話とは違う点がある。最も異なる点は、鬼と格闘する場面がないところである。しかし、範囲を広めて比較研究すれば、12世紀に成立した『今昔物語集』の中に鬼神調伏説話もたくさんある。例えば、鬼神は常に南無佛を称する小児を食おうとすると、小児の称える南無佛の声を感じ、仏が執金剛神を呼び鬼神を降伏し神呪を説く(「経律異相卷三七」)¹⁵。ただ、ベトナムで神様の力と王様の力で協力して鬼退治するのは少し違うのではないかと思う。

その理由は次のようなものが考えられる。

- ・人間は、鬼神には超然たる力と、飛行、変化などの能力があると信ずるから、鬼神を信仰する。
- ・鬼退治は人間にはできないものと思われており、鬼神に依頼する（金亀神のケース）。
- ・11世紀に中国から独立した李朝は中国の圧力に対抗するためにより強大な政権が求められて、王の権力も称揚された。

しかし、15世紀から19世紀までに成立した漢文説話の中には「鬼の格闘」「鬼の血の跡をたどって正体を確認する」「鬼の再来」というモチーフがよく見られる。例えば——陳王朝（13-14世紀）に寺院がたくさん建てられたが、戦争で壊れて、十分の一しか残っていない。あるところで強盗に略奪され、撃滅することができなかつたため、県長が鬼魅にからかわれるのではないかと思った。ある日の夜、狩猟の人が二人の強盗を見て、弓で射当てて、村落の人々を呼び、松明を燃やして、血の跡をたどり追いかけると破れたお寺に至った。そして矢があたった二つの神像を発見した（『伝奇漫録』『東潮廢寺録』）。

また、「鬼再来」というモチーフの例を挙げると、段林という村に女の妖精がいて、よく人をからかっている。杜さんが若い時に窓で勉強していると窓から手が差し込まれるのを見た。県にある法師に五つの糸で結ぶと妖精が亡くなるという「鬼退治」の方法を教えてもらった。翌日、妖精がまた来た。彼は法師が教えた通り、五つの色の糸で結ぶと妖精は手を引き出すことができなかった（『公餘捷記』『范鎮、杜汪記』）。

以上述べたように、ベトナムでは黎朝から阮朝初期までの社会は外国からの侵略の危機はないが、内戦と政権への抵抗運動が続き、また、経済不振のため、社会も不安定になった。内戦で亡くなったり、凶作で亡くなった人が多く、社会に流通する霊鬼に関する伝説、伝承も多くなった。また、当時、中国との交流も盛んになり、『搜神記』など、志怪小説を輸入したため、中国、日本の説話における「鬼退治」と同じ説話が発生した。今回、時間的制約のため、詳細は言及できないが、会議紀要にはベトナムの漢文説話における「鬼退治」につ

いて更に明確に述べたいと思う。

おわりに

ベトナムの漢文説話は決して数は多くはないが、中国、日本と同様、早くから「鬼退治」の説話があり、共通する話も多い。日本とベトナムの古典文学がインドと中国の仏教という共通の起源から、それぞれの歴史的条件や風土に適した発展を遂げて行ったことが分かる。以上に取り上げた「鬼退治」に関する各モチーフを比較すると、いずれも世界、また中国の説話、伝承を色濃く反映するモチーフであると言えるだろう。

ベトナムの漢文説話における「鬼退治」のモチーフに関する比較研究の目的はベトナムと日本の説話の起源を明らかにすることだけではなく、両国の民間文学の創造性、民族性を探究し、その特徴を明らかにするところにある。以上述べたように『嶺南摭怪』における「鬼退治」は中国、日本の説話と比較すると鬼と格闘する場面がないという相違点がある。その理由はベトナムでは太古から鬼神を深く信仰し、また、人間にはできないことがらを鬼神に依頼することがあり、鬼神に助けられる王権は人々に信頼されるからである。そのため、ベトナムは鬼とはむやみに格闘しない。そして、人間の智慧と神霊の力が協力することによって初めて鬼は退治されるのである。

今回は時間的制約により、ベトナムの漢文説話における「鬼神」について概説するに止まり、「鬼退治」を中心に比較したものの、日中の「鬼退治」の先行研究として、河野貴美子氏のものだけを取り上げて、比較した。他にも『日本霊異記』、『今昔物語集』研究は多くあるが、それにほとんど触れることができなかった。今後補充して、まとめ直したいと思う。また、東アジアの漢文文化圏における韓国・朝鮮との比較研究にも言及できなかったが、今後諸外国の研究者との協力により、漢文文化圏における新たな認識が得られることを期待する。

参考資料

- 1 “Di san Han Nom Viet Nam-Thu muc de yeu”『漢喃遺産・提要書目』TRAN NGHIA, PROF.FRANCOIS GROS 編纂。NXB.KHXH 社会科学出版社、1993年。
- 2 “Tong tap tieu thuyet Han van Viet Nam”『越南漢文小説総集』TRAN NGHIA 編纂、世界出版社、1997年。
- 3 BUI VAN NGUYEN: “Viet Nam than thoai va truyen thuyet”『越南神話や伝説』Mui Ca Mau 出版社、1993年。
- 4 景戒: “Nhat Ban linh di ky”『日本靈異記』訳者: NGUYEN THI OANH、文学出版社。ハノイ、1999年。
- 5 NGUYEN THI OANH: “Kieu truyen danh lui than Sam trong truyen co dan gian Viet Nam, Trung Quoc va Nhat Ban”『中国、日本、ベトナムの漢文説話における「雷神退治」について』漢喃雑誌、3(88)号、2008年、32-49ページ。
- 6 関敬吾: 『日本昔話大成』角川書店。1979年。
- 7 瀬川拓男・松谷みよ子: 『日本の民話7妖怪と人間』角川書店、1973年。
- 8 松村武雄: 『中国神話伝説集』社会思想社教養文庫、1976年。
- 9 内田道夫: 「日本の説話と中国の説話—日本靈異記と今昔物語集を中心に—」『東北大日本文化研究所研究報告』五、六、1971年。
- 10 小峯和明: 『今昔物語集を学ぶ人のために』世界思想社、2003年。
- 11 小峯和明: 『今昔物語集の形成と構造』笠間書院、1985年、<補訂版>1993年。
- 12 乾克己、小池正胤、志村有弘、高橋寛、鳥越文蔵: 『日本伝奇伝説大事典』角川書店、1988年。
- 13 王國良: 『六朝志怪小説考』文史哲出版社。台北、1988年。
- 14 陽義在: 漢魏六朝志怪書的神秘主義幻想。『中國歷朝小説與文化』業強出版社、台北、1993年。
- 15 李劍國: 『唐前志怪小説史』南開大學出版社、天津、1984年。

〔注〕

- ①河野貴美子: 『日本靈異記と中国の伝承』。勉誠社。平成8年(1996年)。
- ②林翠萍: 「『搜神記』与『嶺南摭怪』之比較研究」。国立成功大学中国文学研究所修士論文、中華民國八十五年(1996年)。
- ③TRẦN THỊ AN: “Đặc trưng thể loại và việc văn bản hóa truyền thuyết dân gian Việt Nam”. Luận văn Tiến sĩ. Hà Nội, 2000. 「ベトナム民間伝説の流転と類型特徴」博士論文。ハノイ2000年。
- ④『禪苑集英』は僧伝であるが、説話集の性格を帯びた仏僧の伝記集。
- ⑤本稿に出たベトナムの漢文説話は全て漢喃研究所が所蔵しているものである。
- ⑥武瓊: 『嶺南摭怪』。漢喃研究所所蔵、図書番号: A.2914。
- ⑦「神跡」とは亭、祠、廟で祭られた神々の履歴、功績、などについて書かれているテキストである。現在、漢喃研究所所蔵の神跡数は535冊である。NGUYEN THI OANH 「漢字・字喃研究院所蔵文献—現在と課題」『文学』11、12月号岩波書店、2005年、142-157ページ参照。
- ⑧本稿に出た『伝奇漫録』は文学院が所蔵している『新編伝奇漫録』における『伝奇漫録』(漢文部分)である。番号はHN.257である。
- ⑨DONG TRIEU (東潮)は地名で、ベトナム北部のQUANG NINH (広寧)省に属するところである。
- ⑩PHAM NHAN (范顔)というのは東潮で祀られている神様の名前である。亡くなってから、鬼になっ

て、女性が出産した血を食べる鬼となった。（『公餘捷記』『范顔廟』。）

①注②参照。

②NGUYEN THI OANH：「ベトナム漢文説話における「雷神退治」のモチーフについての比較研究」『アジア遊学』、114号、勉誠出版、2008年、70-82ページ参照。

③TRẦN NGHĨA：“Truyền thuyết Mỹ Châu - Trọng Thủy phát triển qua các thời đại”, Nghiên cứu văn học, số 4/1962, tr.31-39.「時代に流転した媚珠・仲水という伝説について」文学研究雑誌、4 番号、1962年、31-30ページ参照。

④『搜神記全訳』。黄条明訳注、貴洲自人民出版社、1999年。(427)、(105)とは『搜神記』の巻の話数番号である。

⑤注①の268ページ参照。

* 討議要旨

村尾誠一氏は、ベトナムには中国に侵略されている歴史があるが鬼が中国の侵略者の比喩として考えられているという考え方はできないだろうか、と尋ね、発表者は、中国からの侵略についても地理歴史を踏まえて考えるべきところ、と答えた。

金龜古傳 左京孝男古隱日之也

欣銘如可陽王夢也、原巴蜀之人、姓蜀、諱冬、諱因、先祖求祀於
冬、婿娘為婿、姻不、而、即、悲、之、津、長、晴、不、遂、志、乃、奔、矣、及、祀、王、主、文
部、之、也、故、号、欣、銘、也、字、之、孫、也、于、越、叢、之、地、立、數、層、之、在、東、岸、恩、古
曠、是、也、社、社、呼、社、廟、王、乃、立、壇、場、祭、戒、祈、禱、可、神、求、之、乎、立、三、月、初
七、日、見、一、老、翁、因、從、西、面、而、來、直、斗、塔、門、以、曰、不、見、之、故、候、時、而、致、王、主、而
迎、入、殿、行、礼、而、同、曰、喜、人、得、此、地、已、能、終、崩、徒、其、其、切、黃、不、也、感、感、使
者、謂、王、曰、他、日、待、王、使、与、王、主、深、好、候、乃、成、老、翁、怪、不、信、老、翁、林、安

『嶺南撫怪』、『金龜古伝』